

聖書：コリント人への手紙第二 1：1～5

説教題：あらゆる慰めに満ちた神

日時：2024年9月1日（朝拝）

今日からコリント人への手紙第二を開きます。ご記憶かと思いますが、昨年3月までコリント人への手紙第一の説教をさせていただきました。それに続けて第二の手紙を説教することを考えていましたが、創世記の説教が6章で止まっており、それを完了させてほしいとの声をいただいたこともあり、先月まで創世記の説教を続けて来ました。それを終えましたので、このコリント人への手紙第二の説教に戻って来ました。

この手紙は第二の手紙とタイトルがつけられていますが、実はパウロがコリント教会に宛てて書いた2通目の手紙ではありません。コリント人への手紙第一も実は最初の手紙ではありませんでした。Iコリント5章9節に「私は前の手紙で、・・・と書きました」あり、Iコリントに先立つ手紙があったことが分かります。ですから第一コリント書は2通目の手紙だったと考えられます。ではこのIIコリント書は3通目かという、その前にもう一つの手紙を書いたことがこの手紙の2章4節から分かります。そこに「私は大きな苦しみと心の嘆きから、涙ながらにあなたがたに手紙を書きました」とあります。一般に涙の手紙と呼ばれます。ですからこのコリント人への手紙第二はパウロがコリント教会に宛てた4つ目の手紙であったと考えられます。大雑把に言えば、この4つ目の手紙は、3つ目の涙ながらに書いた手紙が功を奏したことを知って、安堵の内に書かれた手紙です。しかしながらまだまだ未解決の問題もあり、一筋縄では行かないコリント教会だったことがこの手紙の色々なところから伺えます。そのことは追い追いその箇所を見て行く時に触れたいと思います。

最初の1～2節は他の手紙と同様の形式による挨拶です。本来はこの1～2節だけでも十分に1回の説教をすることができますが、先に見た第一コリント書の冒頭と重なる点も多いですし、できればこの手紙の内容にさっそく入りたいと思い、ここでは基本的なポイントを確認する程度にとどめたいと思います。

まず差出人はキリスト・イエスの使徒パウロです。彼は先の手紙と同様、「神のみこころによる」とつけました。これは自分から使徒になったのではないということです。

パウロを使徒として立てたのは神であり、その神からの言葉として私たちはパウロの言葉に聞いて行かなければならないということになります。また共同差出人として愛弟子テモテの名も記されます。彼はパウロとともに第二次伝道旅行で最初のコリント宣教を行った人であり、また第一の手紙が書かれた後、パウロに遣わされてコリントへ赴いた人でもありました。その彼の名もここにあげられます。

宛先はコリントにある神の教会。先の手紙でもパウロはコリント教会を「神の教会」と表現しました。これはとても大事な言葉です。つまり教会は単なる人間の同好会やサークルのようなものではない。教会は神のもの、神の所有です。この光の下ですべてのことが考えられ、実践されて行かなければなりません。また「アカイア全土にいるすべての聖徒たちへ」とも言われています。アカイアはより広い地域の名前で、コリントはその首都に当たる大都市でした。これはアカイアにある他の信者の群れもコリント教会と密接な関係にあったことを示すものでしょう。

そして 2 節に他の手紙にも見られる最初の祈りが記されます。「私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安があなたがたにありますように。」

こうして 3 節から本論に入ります。そしてまずここにこの書の特徴が現れています。通常、パウロの手紙では最初の挨拶に続いて何が記されるでしょうか。多くの手紙では宛先の教会についての感謝が述べられます。神がその教会に働いて、どんな良い実を結んでくださったか。それを数え上げて神に感謝することからパウロの多くの手紙は始まります。ところがこのⅡコリントはそうになっていません。ここでまず記されているのはパウロたちが神から受けた慰めについてです。そのことで彼は神を賛美しています。そしてこの部分の最後の 11 節では、コリント人たちがパウロたちのことで神に感謝することが言われています。これは注目すべき違いです。いつもと逆ですね。読者たちに注目してパウロが神に感謝するのではなく、パウロたちに注目して読者たちが神に感謝するという構図になっています。ここにこの書の関心が現れています。すなわちそれはパウロたちをどう見るか、パウロたちをどう理解するかということです。先のコリント人への手紙第一にもその雰囲気はありましたが、この第二の手紙からはっきり分かることはコリント教会の中にはパウロを使徒とは認めない人たちがいたことです。自分たちこそ大使徒であると主張し、パウロを見下す者たちがいた。そういう人たちの主張にコリント教会全体が流される危険があったのです。もしそう

なれば、それはパウロ個人が捨てられるのみならず、パウロが語る福音も捨てられることを意味します。ですからそういうことにならないように、この書はコリント教会がパウロを使徒として正しく理解してくれることを願って書かれた手紙なのです。そしてそれはイコール彼らが福音をもう一度良く理解し、その福音に生きる者となるようにという願いのもとに書かれたということです。同じく私たちもこの手紙を通して福音について改めて学び、その素晴らしい世界に生きる者へ導かれたいと願います。

以上のようなこの書の性格を踏まえつつ、今日は 3～5 節までの箇所から三つのことを心に留めたいと思います。まず一つ目は私たち信仰者にはキリストにある苦難があるということです。3～5 節で何回も出てくる目立つ言葉は何でしょうか。それはまず「慰め」です（日本語訳で 5 回）。それとともに良く目につくのは「苦しみ」とか「苦難」という言葉です（こちらは 3 回）。ここにこの冒頭の部分のテーマは苦難と慰めであることがはっきり示されています。なぜこんな内容からパウロは書き始めたのでしょうか。それはコリント教会の中に、パウロが苦難を多く経験しているのを見て軽蔑する人たちがいたからです。コリントはこの地方最大の豊かな都市であり、当時のギリシャ・ローマ文化の影響を強く受けていた町でした。そんな彼らのリーダーシップ観、リーダーはどんな人であるべきかという考えも当時の影響を強く受けていました。どんな人がふさわしいのでしょうか。彼らによれば、それは一言で言って「強い人」です。人々に強く語りかけることができる人、雄弁な人。自分の資質や能力を誇ることができる人。また風采が立派で、存在感があり、圧倒的な個性を持つ人。目に見える成功を人々に示し、常に勝利しているような人。そんな基準からするとパウロは落第します。後の 10 章 10 節にこういう言葉が出て来ます。「パウロの手紙は重みがあって力強いが、実際に会ってみると弱々しく、話は大したことはない」と言う人たちがいる、と。また彼らがパウロを見下す大きな理由として、彼が経験していた苦難の問題がありました。祝福されている器は、いつも栄光の状態、名誉ある状態、輝かしい状態にあり、苦難とは無関係である。ところがパウロは行く先々で災難に遭っています。これは彼が使徒ではないことか、そのように考えて彼らはパウロを見下していました。そこでパウロは苦難の問題から話を始めるのです。

5 節に「キリストの苦難」という言葉があります。これはキリストに従う結果、その人に訪れる苦難のことです。ある人は苦しみから救われたくてキリストを信じたのに、救われてまた苦難を受けるの？と思うかもしれません。私は救いにはあずかりた

いが苦難は御免被りたいと。しかし、そういうわけには行かないのです。私たちはキリストを信じて、もちろん根本的で決定的な救いをいただきます。罪の赦し、永遠のいのちにあずかります。しかしこの世はまだ天国ではないため、この世で生活する私たちには苦難があります。私たちが今住んでいるこの世は罪によって捻じれている世界であり、神に逆らい、また神が遣わしたキリストを受け入れず、拒絶する世界です。実際この世はイエス様を十字架に付けました。ですからそのキリストを主と信じ、その方について行く生活をするなら、この世で苦難を受けることは避けられないのです。この世はクリスチャンにとって反対勢力が多い世です。そういう世界の中で大胆に福音に生き、福音を伝えて歩もうとするなら、その人には必ず苦しみが来るのです。それは使徒だけではなく、主に忠実に従うクリスチャン全員に当てはまることです。第二テモテ 3 章 12 節：「キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。」　ピリピ人への手紙 1 章 29 節：「あなたがたがキリストのために受けた恵みは、キリストを信じることだけでなく、キリストのために苦しむことでもあるのです。」　私たちはこの苦しみを知っているのでしょうか。キリストに従うなら、そこには労苦や肉体的疲労、また様々な精神的悩み、プレッシャー、心遣い等があるのです。誤解を恐れずに言えば、私たちは苦しみや不快感、不愉快さを少しも味わうことなしにイエス様に忠実に従うことはできないのです。もしそういうものがないとしたら、それは本当にキリストと結ばれているかどうか怪しいということにさえなりません。私たちは自ら進んで苦しみを求める必要はありませんが、キリストに従うならそれは必ずあるのです。ですから私たちはこの苦難を恥じたり、嫌ったり、ましてやその状態にある人を低く考えてはならないのです。むしろこの苦難こそ真の使徒のしるしであり、また真の信仰者には誰にでも見られるはずのしるしなのです。

しかしこれで話が終わりでないところが素晴らしい点です。第二のポイントは、4 節にある通り、「神は、どのような苦しみのときにも、私たちを慰めてくださいます」ということです。このあらゆる慰めに満ちた神がほめたたえられますように、と 3 節で賛美がささげられています。神はどのようにして私たちを慰めてくださるのでしょうか。それはイエス・キリストというチャンネルを通してです。ですから 3 節で神が「私たちの主イエス・キリストの父である神」と言われています。また 5 節で「キリストによって私たちの慰めもあふれている」と言われます。神は直接私たちを慰めるのではなく、イエス・キリストを通して、すなわちその十字架と復活のみわざを通して慰めてくださるのです。

神が慰めの神であることは旧約聖書から示されて来ました。イザヤ書 40 章 1 節：「慰めよ、慰めよ、わたしの民を。——あなたがたの神は仰せられる——」 イザヤ書 66 章 13 節：「母に慰められる者のように、わたしはあなたがたを慰める。」 これは単に心理的に慰めるということではなく、実際に彼らを救い出すことによって慰めるということです。ルカの福音書 2 章 25 節にはエルサレムにシメオンという人がいて、「この人は・・・イスラエルが慰められるのを待ち望んでいた」と記されています。この待ち望んだ慰めはメシアの到来によって現実化することとなります。ですからキリストの到来と、その十字架・復活のみわざを経て、それは現実のものとなり始めています。ここで大事な視点は、私たちは今ここにある時からこの慰めに生きることができるということです。キリスト教の救いは死後の世界にだけ関わるもので、今ここで感じたり、体験したりすることはできないというものではありません。もちろん究極的な救いにあずかるのは主の再臨後、新しい天と新しい地が現れて以降になります。しかしそのあまり見失ってならないことはメシアの時代はすでに始まっており、私たちは今ここでキリストによる慰めに生きることを期待して良いし、またそうすべきであるということです。

どのようにして神はキリストによって私たちを慰めてくださるのでしょうか。それは一つには苦しみのただ中で私たちを励ますことによってです。主の贖いのわざのゆえに今の苦難で終わりになることはない！大丈夫だ！との確信を与え、強めてくださることによってです。また実際に苦難のただ中から救い出してくださるということもあります。この世界には神に敵対する古い世が残っている一方、キリストがもたらした新しいメシアの時代も突入しています。ですから私たちはこのメシアによって危機的な状況から実際的に救われることを期待し、祈って良いのです。この世にはそういう救いはない、それは将来にしかない、とその可能性を閉ざしてはならないのです。もちろんどうなるかは神の最善のみこころに私たちは委ねなければなりません。しかし私たちは苦難のただ中で、私たちを慰めてくださる神の慰めを期待し、祈り求めて良いのですし、また神のみこころにより、現在直面している苦しみから、ある意味で奇跡的に、私たちの思いを超えて救出されることを期待し、祈り求めて良いのです。

私たちはこのような慰めの神を知っているのでしょうか。私たちはキリストの苦難を避けて、この慰めだけを受け取ることはできません。キリストに従い、キリストの苦

難を経験する者が、そのただ中でこの神の慰めを経験するのです。しかもそれはあふれるほどのものであると5節にあります。神がキリストを送ってくださり、その贖いのみわざが成し遂げられたがゆえに、私たちはキリストにあって今ここで神の豊かな慰めに具体的に生かされることができるのです。それはやがての究極的な慰めの先取りとも言うべきものです。

最後三つ目のポイントは、この神の慰めの目的についてです。それは4節後半にある通り、「自分たちが神から受ける慰めによって、あらゆる苦しみの中にある人たちを慰めることができる」ということです。私たちは自分自身がこの神の慰めを経験することにより、他の人をも慰めることができる者となります。そしてこれが神が私たちに慰めをくださる目的であるということです。ですから私たちはこの神の慰めを受けた時、自分のところで止めてしまってはならないということになります。ある人はここをこのように表現しました。神はただあなたを慰めるために、あなたを慰めたのではない。あなたが他の人を慰めることができるように、あなたを慰めたのであると。

一人一人受ける苦難は色々ですし、一人一人受ける慰めも細かい点では違うかもしれませんが、しかし根本的には同じであると言えます。私たちの苦しみはキリストに従う者としての苦しみですし、神がくださる慰めはキリストの十字架と復活に基づく慰めだからです。ですからその慰めを経験した人は、たとえ他の人と受けている苦しみは全く同じでないとしても、この慰めをもって慰めることができるのです。一例として思い起こすのは、私たちの教会が毎年発行している橄欖です。その中には苦しみや格闘の中で、どのような神の慰めを得たか証しくださっている方々が多くいます。私たちはその証を読む時、確かに慰められ、励まされます。それを自らに当てはめ、それによって助けられ、支えられるということが起こるのです。それは神の慰めです。神は私たちがこうして神の慰めをもって互いに慰め合うことを通して、私たちの救いを完成させてくださいます。互いに神の慰めをもって慰め合い、神の救いを指し示し合い、支え合って生きるのが教会なのです。

私たちは今日の御言葉に照らしてどうでしょうか。自分がコリント教会のある人たちのようであることはないでしょうか。この世の価値観に従って、この世の豊かさや一時的な栄光にあやかることばかりを求めて、キリストとともに歩むところにある苦難を嫌がり、軽蔑して、そこから遠ざかろうとしていることはないでしょうか。それ

は実は聖書の福音から外れたあり方です。主と結ばれ、主とともに歩むなら、そこには「キリストの苦難」と呼ばれるものがあるはずで、負うべき重荷があるはずで、しかし私たちが見つめるべきは、神はキリストにあってそれを上回り、それに打ち勝つ慰めを与えてくださるということ。私たちはその慰めを具体的にこの世で経験し、味わいながら生きて行くことができるのです。そのことを思い、与えられるキリストの苦難を恐れずに担い、主に従う歩みへ進む者でありたいと思います。そしてその者に必ず与えられる神の豊かな慰めを知る者とされたいと思います。そしてその神の慰めを経験したなら、それをもって他の人々を慰めることのできる者へ、そして私たちをこのように慰めてくださる「あらゆる慰めに満ちた神」をともにほめたたえる歩みへと導かれてまいりたく思います。